日本語文法

体系と方法

川端善明・仁田義

日本語文法　体系と

江苏工业学院图书馆
藏书章

川端善明・仁田義雄　編

ひつじ書房

ひつじ研究叢書（言語編）

【第14巻】

日本語文法　体系と方法

発　行	1997年10月30日初版1刷
定　価	10000円＋税
編　者	©川端善明・仁田義雄
発行者	松本　功
組版所	株式会社こまつデーターシステム
印刷所	互恵印刷株式会社
製本所	田中製本印刷株式会社
発行所	有限会社ひつじ書房

101　東京都千代田区猿楽町2-2-5 興新ビル206
Tel 03-3296-0687／Fax 03-5281-0178
郵便振替00120-8-142852

造本には十分注意しておりますが，落丁乱丁などがございましたら，小社宛お送り下さい。送料小社負担でお取り替えいたします。
ご意見，ご感想など，小社までお寄せ下されば幸いです。

info@hituzi.co.jp
http://www.hituzi.co.jp/hituzi/index.html
ISBN4-938669-92-7　C3081
Printed in Japan

組織的な不法コピーは，研究文化を破壊します。小社の書面による許可のない本書の複製と複製されたものを購入することは同様に，人道にもとる行為です。

目次

未展開文をめぐって　仁田義雄　1
文研究の論理　石神照雄　25
連体装定の類型と交渉　田上　稔　45
形容詞連用形における意味的中立化　小野正弘　61
程度副詞の反期待について　加藤久雄　79
連用成分の関係構造――格助詞成分を中心に――　森井　紳　97
終止形接続の「見ゆ」について　内田賢徳　115
動作の併行表現の歴史――上代　動詞終止形重複形・動詞連用形重複形――　安部清哉　133
助数詞被覆形の用法――名詞被覆形とク活用形容詞語幹とから――　蜂矢真郷　153
上代語の「けり」の意味　鈴木　泰　171
三代集ラムの構文法　野村剛史　191
完了辞・過去辞の通時的統合――「た」への収斂――　山口堯二　211
格助詞への変貌――狂言資料における「の」「が」――　浅見　徹　229
現在の存在を表す「いた」について――国語史資料と方言から――　金水　敏　245

「迷惑受身」の意味論　柴谷方良　左1
日本語知覚補文のテンスの解釈　澤田治美　左23
連体機能をめぐって　高橋太郎　左39
評価成分をめぐって　工藤　浩　左55
うらめ条件－接続のモダリティ副詞――「たとえ」の使用条件――　小矢野哲夫　左73
否定と呼応する副詞について　近藤泰弘　左89
「が」の用法の概観　菊地康人　左101
現代語「こそ」と「が」「は」　丹羽哲也　左125
語彙と文法――幼児の言語発達を例として――　前田富祺　左141
ヒト名詞の意味とアスペクト・テンス　宮島達夫　左157
「独り言」をめぐって――思考の言語と伝達の言語――　森山卓郎　左173
後記　川端善明　451

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

未展開文をめぐって

仁田　義雄

一　はじめに

文とは何かという問題は、文法研究の出発点であるとともに、終着点でもあり、かつ、何を文と認定するかの問題でもある。文の規定は、古来、言語学上・文法研究上の難問の一つである。C.C.Friesは、“The Structure of English”の中で、文の定義が二百余り存することを指摘している。文規定の難しさは、常識的に文と呼ばれるものが多様で多岐にわたっている、といったことに大いに関係している。

常識的に文と呼ばれるものが多様で多岐にわたっていることの一つの現れとして、いわゆる一語文や独立語文と呼ばれるものの存在が上げられる。一語文の存在は、山田孝雄が文の認定を考えるにあたって、内容中心主義に赴かせたものであり、「統覚」という概念を導入することになった起因でもある。また、三尾砂は、「あ！」「雨だ！」「ほら！」「自動車だ！」「火事だ！」「お客さんよ。」「ごはんですよ。」「はい。」「いいえ。」「さあ！」「君！」「只今。」「お休み。」などの例を挙げ、「場を指向する文」として一類化し、文の切れっぱしでなく全一的なもので、場の全領域を残りなく指向するものとして、考察を加えている。

しかし、いわゆる一語文や独立語文といった未展開文についての考察が十分であったとは思われない。本稿の目的は、未だ十分には考察の加えられてはいない未展開文について、少しばかり詳しい考察を施すことにある。未展

開文は、いわゆる述語文に比して周辺的な存在であり、文として極限的な存在である。周辺的、極限的であるということが、考察に値しないといったことを意味しないのは、言うまでもない。未展開文への考察は、未展開文が文として一つの極にある存在であることによって、かえって、文の成立について考えさせるものを含んでいる。未展開文への考察は、文がそれが成立する場や文脈にいかに負いいかに依存しているかを教えてくれるだろう。文が場や文脈の中にある存在であるということは、比較的、場や文脈からの独立性が高い述語文にあっても、基本的に同断であろう。

二　未展開文の二類

未展開文は、それなりの関連性を有しながらも、タイプの異なる二類に分かたれる。〈事態即応型〉〈言語行為保持型〉と仮称する二類である。事態即応型とは、「アラ！」や「火事！」のように、未分化・未分析なまま全一的に事態を志向・表現し、そのことで、事態に対するある種の心的態度を表出したものである。それに対して、言語行為保持型とは、「オイ！」や「ハイ。」「エエ。」のように、言語行為の基本たる対話行為の発生・維持に関わるものである。言語の受け手を定立するために呼びかけることで、言語行為の端緒を開いたり、先行発話に対して応じ手としての態度を表明することで、言語行為の維持・促進を行うものである。

事態即応型は、遭遇した、あるいは出来させるべき事態に対する切迫性を帯びた未分化・未分析な把握・表出であることによって、未展開な表現に止どまる。それに対して、言語行為保持型は、発生・維持といった言語行為の保持を志向する話し手の営みを、そのまま未分化に表出したものであることによって、未展開な表現に止どまる。反応・志向の対象が、遭遇・出来事態であるのか、対話行為の発生に関わる対手や先行発話といったものであるのか、という異なりは存するものの、ともに、それらに対する言語による源初的な未分化な対応形態である。

以下、未展開文の諸相を具体的に少しばかり詳しく見ていく。

三　未展開文の諸相

一　事態即応型

まず、未展開文の一つの下位的タイプたる〈事態即応型〉から見ていく。事態即応型は、形成に関わる語詞の種別によって、〈感嘆詞未展開文〉と〈概念詞未展開文〉とに分けることができる。さらに、概念詞未展開文を〈体言型〉と〈用言型〉とに分ける。

一―一　感嘆詞未展開文

最初に感嘆詞未展開文を瞥見する。未展開文の代表の一つは、

（1）（蜂が頭に止まる）両津「あっ！」（秋本治『こちら葛飾区亀有公園前派出所71』）

（2）（コピー機、動き出す）麗子「あっ！　直った！　凄い！」（葛飾92）

（3）（電話が鳴る）典子「あら！　電話。」（弘兼憲史『課長・島耕作8』）

（4）（ボート・コスターが止まる）両津「ありゃ！　さかさに止まった？」（葛飾71）

（5）神谷は、一息にビールを飲んで、「ああ、うまい……」（鎌田敏夫『金曜日の妻たちへ』）

（6）「アー、アー、何度ヤッテモウマク行カナイ。」

（7）（水位が上昇する）両津「おっ！　水かさがふえる!!」（葛飾71）

（8）木元は首をねじったままの姿勢で加賀に浴びせた。「おお、そこに居たか。」（山村直樹＋中町信「旅行けば」）

（9）（キャビヤが来る）小暮「ほう。こりゃゼイタクだ。」　（島8）

のような、感嘆詞によって形成されているものである。こういった感嘆詞によって形成された発話がどういった特性を有しているのかを、少しばかり見ておく。次のことが指摘できよう。（1）「あっ！」や（3）「あら！」を例に取れば、（a）この「あっ！」「あら！」という発話は、話し手が［蜂ガ話シ手ノ頭ニ止マル］や［電話ガ鳴ル］といった事態に遭遇することによって、引き起こされたものであり、未分化ながら事態全体に応じたものである。（b）そして、何よりも、出来あるいは遭遇した事態によって生じた話し手の「驚愕」「軽い驚き」といった心的態度そのものを直接的に表出している。（c）さらに、心的態度を表出することにおいて、心的態度の発生の機縁たる出来・遭遇事態を暗示・志向している。（1）（3）だけでなく、（2）や（4）から（9）の未展開文についても、同断のことが言える。この、発話が発話を引き起こした事態全体に未分化ながら全一的に対応している、といった特性を〈事態への即応性〉と仮に呼び、出来・遭遇事態から生じた心的態度を〈事態に対する心的態度〉と仮称し、発話が発話の起因となった事態を暗示・志向するといった特性を〈事態の志向性〉と仮に名付けておく。感嘆詞による未展開文とは、事態に対する心的態度を直接的に表出しながら、心的態度が事態に即応していることによって、その表出された心的態度の背後に心的態度の起因となった事態が志向される、といったものである。心的態度の表出から事態が暗示・志向されはするものの、事態そのものの内実・有り様が一端でも語られているわけではない。心的態度の背後に心的態度発生の起因になった事態が存する、といったことが暗示されているだけである。起因事態の一端すら語られていないことによって、（2）の［コピー機ガ動キ出ス］といった、（1）とは異なった事態においても、（1）と同じく「あっ！」という感嘆詞による未展開文が現出しているのである。

さらに、この〈事態への即応性〉〈事態に対する心的態度〉〈事態の志向性〉は、

（10）（ハチが飛んでくる）麗子「きゃあ！」　（葛飾71）

（11）うーむ、ここで式をあげるのか。　（新井素子『正彦くんのお引っ越し』）

などの、言語化の低いいわゆる「叫び声・うなり声」的発話においても、その存在を確認できる。

また、

（12）隆正が、神谷と一緒に入って来た。「何だ。お前か。」　（金曜日）

のようなものは、叫び声・うなり声的未展開文とは逆に、言語化の進んだ語詞である不定詞で形成されたものであるが、感嘆詞による未展開文に準じるものであろう　また、

（13）（両津、ハチに刺されながら、ハチを捕らえようとしている）両津「いててて。くそ！」　（葛飾71）

（14）私は、多根子の手から写真をとると、一枚一枚を念入りに調べた。「ー畜生ッ！」（島田一男「国道駐在所」）

なども、元来言語化の進んだ語詞を感嘆詞相当に固定化して使用した未展開文である。

上掲の感嘆詞による未展開文や叫び声・うなり声的未展開文では、表出されているのは〈事態に対する心的態度〉であり、起因となる事態は、暗示・志向されてはいるものの、その一端すら語られていない。これらの未展開文で表される〈事態に対する心的態度〉は、感嘆系に限られる。希求系になることはない。また、このタイプの未展開文は、聞き手を目指さない〈聞き手不在発話〉である。[1]

一―二　概念詞未展開文

感嘆詞や呼びかけ詞・応答詞以外の名詞や動詞、形容詞などを、本稿では、仮に概念詞と呼んでおく。そういった概念詞が使用された未展開文を、ここで少しばかり考察しておこう。概念詞未展開文を、概念詞のタイプによって、〈体言型〉と〈用言型〉に分けておく。

一―二（一）　体言型

まず、体言類で形成されている概念詞未展開文を見ておく。これは、〈事態に対する心的態度〉のタイプから、

大きく〈感嘆系〉と〈希求系〉に分けられる。

一―二（一）一　感嘆系

〈感嘆系〉の体言型概念詞未展開文の代表は、

（1）両津「おい、金次郎。」金次郎「あっ、兄ちゃん。」（葛飾92）

（2）（電話が鳴る）典子「あら！　電話。」（島8）

（3）（パトカーが派出所の前に止まる）両津「あっ、やばい。部長だ。」（葛飾71）

などのようなものである。これらは、出来・遭遇事態に対する切迫した把握・認知から生じたものである。「兄ちゃん。」「電話。」「部長だ。」といった発話は、切迫的把握ゆえ、要素・全体に内的分化することなく、いずれも、「体言（＋判定詞）」のみで実現されているが、このままで［兄ノ出現］［電話ガ鳴ル］［部長ノ出現］といった出来・遭遇事態全体と対応し、発話を引き起こした事態全体に即応していることによって、出来・遭遇事態を志向しており、かつ、切迫的把握から来る「驚き」などの、話し手の事態に対する心的態度を帯びている。体言型概念詞未展開文は、感嘆詞未展開文と、〈事態への即応性〉〈事態の志向性〉〈事態に対する心的態度〉を有している点で、共通しているが、事態の志向のし方や事態に対する心的態度のあり方の点で、異なっている。

上掲の体言型の未展開文は、いずれも積極的に聞き手を目指すものではなかったが、感嘆系の体言型未展開文には、

（4）（背後にヘリの音）ボルボ「はっ!!　敵のヘリだ！　逃げろ!!」（葛飾54）

（5）通行人「強盗だァ！　つかまえてくれ！」（葛飾71）

などのように、聞き手の注意を喚起する、といったあり方で、積極的に聞き手を目指すタイプが存する。聞き手を目指すタイプが存することにおいて、感嘆系の体言型未展開文は、感嘆詞未展開文と異なっている。

また、体言型未展開文は、体言類といった概念詞で形成されていることを受けて、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

（6）（外を見て）両津「いい天気だ！」　（葛飾71）

（7）（太陽が照り付ける）両津「ぐおっ、なんて暑さだ。」　（葛飾71）

（8）テレビの競馬中継「思わぬアクシデント。馬がおどろいて動きません。」　（葛飾71）

のように、体言を限定する規定語で広げられることも、少なくない。

いずれにしても、体言型未展開文では、事態を内的に分化統合させて描き出すのではなく、事態の核として呈示された体言的概念に、事態全体が全一的に吸収・収斂されている。〈事態への即応性〉は、体言型未展開文にあっても、中核的な特性である。また、事態全体が、事態の核としての「ものごと」に、収斂されて過不足なく対応させられていることによって、事態全体の指し示しは、感嘆詞未展開文に比して数段明示的になる。事態全体への志向性がより明示的なものになることに応じて、事態に対する感嘆的な心的態度の帯び方は、より少なくなる。

（9）（車を運転していて、前方に塀が見える）強盗「しまった。行き止まりだ！」　（葛飾71）

（10）（乗っているボート・コスターが終点に近付く）両津「もうすぐ終点だ。」　（葛飾71）

（11）（麗子、食事を運んでくる）麗子「おはよう。朝食よ。」　（葛飾71）

なども、事態が分析的に展開されておらず、事態全体が核たる体言に収斂されて表されている、体言型未展開文である。未展開に止どまるのは、指し示される事態が、眼前の情況であるとか、聞き手の目の前にある事物についてである、といったことから来るのであろう。

（12）（強盗を投げつけながら）両津「ボディプレスだ！」　（葛飾71）

のような、みずからが行っている動作を名付けて表示するものも、このタイプである。未展開性が、事態に対する切迫的把握というより、場を密接に含み込んだ事態そのもののあり方によっていることから、これらは、発話が事態全体に全一的に対応しているもの（未展開文）として捉えることができるとともに、場と密接に補完し合いながら全い表現を形成しているもの（省略文）への、踏み出しが既に生じている。

（13）島「販売助成部ショールーム課の島耕作です。」　（島8）

になれば、さらに踏み出しが進んでいる。「うわ！　川に！（葛飾92）」のようなものが省略文の代表であるが、（13）のようなものは、未展開文と省略文との狭間にある。未展開性が切迫的把握でなくなることに応じて、感嘆性といった事態に対する話し手の心的態度の発生が希薄になる。（13）のような文は、その点においても、体言型未展開文の極に位置するタイプであろう。

体言型未展開文の変わり種として、

（14）「分かった！　あれだ！」　（金曜日）

（15）「あ、そうだ！」　（金曜日）

（16）―あ、そうか。三都子が、はいて行ったかな……。　（国道）

のような、気付き・想起を表すものが挙げられる。これらも、指示詞が気付き・想起内容全体をカバーしていることによって、未展開のままである。

一―二（一）二　希求系

次に、同じく体言型未展開文であるものの、事態に即応する体言に担われている心的態度が希求を根底に有する〈希求系〉である場合について瞥見しておく。希求系には〈求め〉と〈命令〉とがある。

まず、〈求め〉を表すものから見ていく。

（1）「水！　水！　水ガ飲ミタイ。」

のようなものが、これである。感嘆系体言型未展開文と同様に、体言「水」に志向している事態全体が収斂されている。違いは、帯びているのが、驚きなどの感嘆系の心的態度ではなく、希求系の心的態度である、という点にある。感嘆系では、眼前の事態を体言に吸収・収斂させたものが、基本であったのに対して、希求系では、希求される事態であることによって、事態は未だ実現していない。そのことを受けて、体言で指示される対象も眼前に存在

していないことが多い。もっとも、（1）のような〈求め〉であれ、次に見る〈命令〉の場合であれ、眼前に存する指示対象を、事態を未分化のまま全一的に志向する体言として取ることができないわけではない。

〈命令〉系の心的態度を帯びる体言型未展開文の例として、

（2）ゆき子「みのり、水。」（内館牧子『ひらり1』）

（3）両津「母ちゃん、金!! 金!! 金ちょうだい。」（葛飾92）

（4）（ギャンブラー、めし屋に入って）「おやじ、めしだ。」（園山俊二『さすらいのギャンブラー8』）

などが挙げられる。希求は、事態実現を要請しうる相手が存することによって、〈求め〉から〈命令〉に転化する。（2）から（4）は、いずれも聞き手を目指す発話である。（4）では、体言だけでなく「ダ」が伴っている。命令は、話し手の事態実現に対する希求の心的態度が、事態実現を要請しうる相手の存在によって、相手への要請の働きかけの態度を加えることにおいて、成立している。

体言型未展開文は、感嘆系だけでなく、上述したように、希求系の心的態度を担うことができる。これは、次に見る用言型未展開文との違いである。希求され実現を求められる対象が、事態全体が収斂させられ過不足なく対応させられる事態の核たる「ものごと」に一致することによって、希求される事態が、事態の核たる「ものごと」において捉えられることになり、体言型未展開文は、希求系の心的態度を担うことになる。

一―二（二）　用言型

続いて、用言類によって形成された未展開文を瞥見しておく。

（1）「おお寒ッ、何て寒いんだ。下田は!」（旅）

（2）（両津、背中に火がつく）「あちちち!」（葛飾71）

（3）（両津、ハチに刺されて）「いてっ!! さしやがった。」（葛飾71）

のようなものが、用言型未展開文の代表である。これらは、「おお寒ッ」「いてっ」などで、出来・遭遇事態全体に未展開のまま全一的に対応し、そのことによって、出来・遭遇事態が志向されている。また、発話は、出来・遭遇事態が切迫的に把握されることから来る、たとえば「驚き」といった話し手の心的態度を帯びてある。用言型未展開文も、〈事態への即応性〉〈事態に対する心的態度〉〈事態の志向性〉といった特性を有して存在している。この種の用言型未展開文には、（1）から（3）のように、話し手の生理感覚を表すものが多い。

また、

（4）（キャビヤがくる。小暮、食べる）「うん！　うまい。」　（島8）

（5）（パトカーが派出所の前に止まる）両津「あっ、やばい。部長だ。」　（葛飾71）

なども、用言型未展開文である。（4）「うまい」は、話し手の感じた味覚を表し、（1）から（3）の生理感覚に繋がるものである。（5）「やばい」も、話し手の心的状態の未展開的表出である。いずれも話し手の内的状態である、という共通性を有している。こういった話し手の内的状態を未展開のまま全一的に表出するのが、用言型未展開文の典型である。

「わぁ、でっかい！」のような、対象の属性的なあり方を捉える表現は、感嘆の情を色濃く帯びることがあるにしても、属性の持ち主の存在がすぐさま了解されることによって、言い換えれば、用言が未展開的なまま事態を全一的に志向していないところの、既に分析的表現であることによって、未展開文ではなく、省略文である。当然、未展開文と分かり切った要素を言い表さない省略文とが、常に截然と分たれ切るわけではない。

（6）航と翼が子供部屋から飛び込んで来て、久子のまわりを駆けずりまわる。「うるさいわねえ!!」（金曜日）

などは、話し手の心的状態と密接に関わりながらも、了解された存在についての属性であることによって、未展開文であるよりは、もはや省略文の側に属するものであろう。

また、用言型未展開文の特性の一つとして、今現に存している事態しか表せないということが挙げられる。

（7）（車を運転していて、前方に塀が見える）強盗「しまった。行き止まりだ！」（葛飾71）

（8）（電話器が壊れている）両津「弱ったな。」（葛飾71）

（9）部長「やるんだ！　これは命令だ！」両津「まいったな！　こいつらきたえるしかないのか。」（葛飾71）

（7）から（9）の用言は、タ形を取ってはいるが、過去の心的状態を表しているわけではない。それが証拠に、「サッキ弱ッタ」のように、これらに過去を表す時の副詞を付加すると、当の未展開文が表していた意味を表さなくなってしまう。「しまった」に至っては、タ形に固定されている。

用言型未展開文が帯びる心的態度は、感嘆系に限られる。体言型と異なって、希求系を帯びることはない。

（10）「今回は……　ま、乾杯。」（金曜日）

（11）（両津と本田、プールの回転式急流滑り台の上で）両津「それ、出発。」（葛飾71）

のような動作名詞で成立している文は、未展開文ではない。遂行を求めている動作が明示されており、その遂行を働きかけられている相手が自明であることによる非顕在であることによって、もはや通例の述語文の一種である。「全員、起立！」と同類であり、「ソコノ菓子、オ食べ。」に繋がっていくものである。

二　言語行為保持型

〈事態即応型〉の未展開文に対して、もう一類の未展開文として、〈言語行為保持型〉の未展開文が挙げられる。以下、言語行為保持型について見ておく。言語行為保持型を、〈呼びかけ〉と〈受け応え〉とに、まず分かっておく。

二―一　呼びかけ

言語行為保持型の一種として、まず、言語行為の発生を計る〈呼びかけ〉が挙げられる。呼びかけは、呼びかけ

る存在を言語の発信者にし、呼びかけられる存在を言語の受信者にすることによって、言語行為成立の重要な要件である、発信者と受信者を作り出し、言語行為の場を開くものである。

呼びかけには、呼びかけ詞とでも名付ければよい語詞で形成されているタイプと、名前および人称詞で形成されているものとがある。

呼びかけ詞で形成されているものとは、

（1）東彦が日本間に入っていくと、真弓は、何をするでもなくポツンと座っていた。「よう……。」（金曜日）

（2）（両津、自転車で金次郎を追いかけて）両津「おい、金次郎。」金次郎「あっ、兄ちゃん。」両津「早く後ろに乗れ！」（葛飾92）

（3）「おい、ビール。」隆正が言うと、「はい。」と玲子は身軽に立っていった。（金曜日）

（4）「やあ、山村さん。こ、こんな所にいたんですかあ。」（旅）

（5）典子「ねえ、裕作ちゃん。私、一つあやまらなければならないことがあるの。」（島8）

のようなものである。呼びかけ詞による呼びかけは、呼びかけられた存在の注意を引くことによって、相手を言語行為の対手に据えるものである。そして、そのことによって、そこに言語行為の場が準備され開かれることになる。

また、

（6）東彦がダイヤルを回した。「もしもし……水晶苑さん？……」（金曜日）

のようなものも、この呼びかけの例である。

さらに、このタイプには、

（7）真弓は、元気な顔になって起き上がった。「おい、いいのか。」「いつまでも寝てられないわよ。」（金曜日）

のように、単に呼びかけられた相手を言語行為の受信者に据えるだけでなく、話し手の何らかの心的態度をも呼びかけに加えるものが存在する。上掲の例では、帯びさせられる心的態度は、「とがめ」的なものであろう。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com